
magic&sowrd

クリフ = フィッター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

m a g i c & a m p ; s o w r d

【Nコード】

N 1 6 2 6 V

【作者名】

クリフ＝フィッター

【あらすじ】

平凡な高校生が、見つけた一冊の本

この本見つけたことを境に少年の生活は一変する。

ブローグ

陽気な音楽が流れながら画面にゲームクリアと表示される。

蓮「やっどクリア…か」

ゲームのコントローラーを置きゲーム機の電源をOFFにする。
時計を見るともう6時半、そろそろ学校に行く時間だ。
欠伸をしながら部屋を出て台所へ足を進める。

いつも通りに弁当を作る。

蓮「しっかし、3年間も自炊してるとだいぶ慣れてくるな」

手慣れた手つきで卵焼きを作り弁当箱につめていく。うん、我ながら上手くできたな。

制服を着て時計に目をやると時計の針は7時を刺している。

もうこんな時間かよ。早いな…

愚痴を言いながら作った弁当を忘れないように鞆に入れて家を出る。

いつも通りの町並みにいつも通り登校している生徒。いつからだろうこの日常が退屈だと感じるようになってきたのは…
と考えているうちに学校に着く。

生徒A「おはよう、篠宮」

ふと後ろから声をかけられる。同じクラスの男子だ。反射的に挨拶を返して校舎の中へと入っていく。

——この俺、篠宮 蓮のいつもと変わらない毎日が始まった。
……

〔放課後〕

今日もいつもどおりだったな、なんかこう新しい刺激が欲しいよ……
いやマジで。

最近持つてるゲームは大体クリアしちゃったしなあ。

どうすっかな……とりあえず帰ってから考えるか。

玄関を出て夕暮れの道のりを歩き帰路につく。

いつもとかわらない人ごみを抜けて家の近くまで歩く、そのとき不意に背筋に冷たい視線を感じたが、直ぐにその感覚はなくなったので俺はまた気にせず歩き始めた。

…家に着いたはいいいんだが、ほんとに何しよう…
鞆をいすに置いてから家の中を物色する。

とくに面白いものなんか無いしな…

部屋の中を色々見てみると、ふと親父が使っていた部屋に目が留まる
そういや、最近中に入ってねえな…たまには掃除してやるか。

台所に行き掃除道具をひっぱり出して来て中に入る。

「うわっ！汚っ！！蜘蛛の巣とかすごいな…」

「げえ…ここの本棚にある本なんか腐ってないか！？これ・・・」

……………とりあえず掃除するか。

つたく、なんだよこれは。

この部屋の掃除をしなかった俺も悪いが、こんなに雑に物を置いとく親父も悪いだろ…

だいぶ片付いたかな。

額に浮かんだ汗を拭きながら辺りを見渡す。

始めに入ったときよりはかなりましになっているがやはり根本的にはまだ汚い。

「疲れた…ちよつと休憩。」

椅子に座り適当に本を一冊手に取りパラパラとページをめくる。

最初のページは何も書かれていなかったが、半分をすぎた辺りから
変な模様みたいなものが大量に書かれていた。

何の模様かは解らないが、最後に英語みたいな文字で（ご丁寧
にフリガナつきで）何か書かれていた。

「えっと…幾多の宇宙を繋ぐ幾多の扉、我を行く道を記せ、音を奏
でよ？」

なんだこれ？詩か？わけわからん。

どうでもよくなり本を閉じようとしたら、本がいきなり激しく光を放ち始めた。

蓮「な、なんだよこれ！！」

君が悪くなり捨てようとしたがすでに遅く、本から発している光を見てしまっている俺は意識を失った。

一日目（前）

p

「ここは…？」

目を覚ますと俺の知らない場所にいた。

石造りの部屋だ…見たところ物置か？ってか何で俺はこんな所にいるんだ？

混乱した頭で辺りを見渡すと、目を疑いたくなるような物が次々と目に飛び込んできた。

剣や鎧、槍や弓といったゲームとか漫画の世界でしか見た事の無いような武器だ。

半信半疑で手にとって見ると重く、偽者じゃない事は十分にわかった。

問題は どうして俺がこんな所にいるのかということだ。

あの本のせいなのか？だが目が覚めて俺が気づいた時には持っていなかったし…どうしようか。

とりあえずこの部屋を出るか。外に出てここが何処か解れば、まだ色々対策がたてれるしな。

そう思いドアノブに手をかける、外に出ようとすると向こう側から足音のようなものが聞こえてくる。

なんとなく嫌な予感がしたので、俺は自分から開けるのをやめて後ろに下がった。

こうゆうパターンってゲームじゃ、だいたい盗人扱いされるんだよな…

流石に盗人扱いは避けたいので、立て掛けてある鎧の影に隠れる。

ドアを開けて入ってきたのは二人のようだ。

話声が聞こえる。

???「しかし本当にいいのかしら?ここにある武器を頂いても」

???「いいとも。君は今回それだけの働きをしたのだからね。好きなものを持っていくといい」

声からすると若い女と老人か。

さて…うまくことやり過ぎせるのかね。お決まりのパターンで見つけるのは勘弁だしな。

???「ではこれを頂いてもいいかしら」

???「いいとも持って行きなさい。」

なにやら一つの武器をもって再びドアの方へ戻って行く。

蓮「ふう…」

どうやらばれなかったみたいだ。と気を抜いてため息をついてしまった。

???「待つて!!誰かいない?」

ヤバイ！！今ので気づかれたか？

体中にじつとりと汗をかく

「？？？「ふむ、探してみる。少し待ちなさい」

いくらなんでもこの状況で見つかったら完全に盗人確定だぞ俺。

しかしあの二人怪しんでる割には動いてないよな…

「？？？「ほほ、確かにいるわい。その鎧の影じゃな」

何い！？何故ここがわかったんだ！！

あたふたしていると足音がどんどんこっちに近づいてくる。

くそっ！こうなったらやぶれかぶれだ！強行突破するしかねえ！あいにく相手は女と老人。

俺が全力で走れば追いつかれる心配も無い。

足音が鎧の前まで近づくの待って、勢いよく飛び出す。

「？？？「きゃっ！」

目の前にいたのは女の方だった。飛び出した結果、鎧が彼女の方へ崩れて一時的に下敷きになっている。

悪い事をしたと思うが、構わずドアの方へ走る。

老人らしき人物の姿はいつのまにか消えていた。

ラッキー！これなら十分に逃げ切れる。

部屋を出るとそこは長い廊下だった。辺りをみるかぎりよくゲームで見る、何処かの城のようだ。

認めたくなかったが…マジで夢とかじゃないよね…これ。

ふと後ろを振り返ると爆発音みたいな物と同時に「あつたまきたー
ー！！！！！」という叫び声が聞こえ先程の女が勢いよく部屋から
飛び出してきた。

???「この盗賊め！覚悟しなさい！」

目の前にいる女は腰にあるレイピアを抜きこちらへ向けてきた。

ものすごくヤバイ状況だが不思議と落ち着いていた。

理由は、どうやらいまだに現実感が薄いからだ、どうせ本当に刺す
気はないだろ…

???「はあっー！」

なんて虫のいいことを考えているといきなり左肩に異物が突き刺さ
る。

蓮「ぐっ…あが…」

痛い、イタイイタイ！——これは現実だ！！認めたくないが俺
は変な世界にきて、今日の前にいる女に殺されかかっている。

逃げなくては！！脳が必死に逃げろと警告し続ける。

その瞬間、俺は刺さっているレイピアを力ずくで抜き、自分でも驚
くほどの速さで走りだしていた。

一刻も早くあいつから逃げなくては。

その一心で走り続け気がついたら見知らぬ部屋の前に着いた。
どうやらここで行き止まりのようだ。

後ろからはあいつの声が聞こえる。

中に入ってやり過ぎすしかない。そう思いドアノブに手をかける。ひんやりとしたドアノブの感触を感じながら、俺は嫌な想像をしてしまった。

「もし…あいつみたいに武装している奴が、他にいてこの部屋にもいたら？」

とてつもなく危険な状況だが、迷っている時間はなかった。

迷ってる場合じゃないよな畜生！

ドアを開け中に入る

誰がいるという訳でもなかったが、かわりに何もなかった。部屋の中は壁に剣が何本か立て掛けてあるというだけで他にはなにもない。しかも最悪なことに部屋の広さと殺風景さから行ってここは訓練場かなんかだろう。どこにも隠れられるような場所はない。

蓮「最悪だぞ…おい」

一応部屋の鍵は閉めたが、いつ破られるかわからない以上腹を決めなければ・・・

ここで戦うしかない。俺みたいなゲーム好きで武術なんてやったこともない一般人にどこまでやれるかはわからないが、やらなければこちらがやられるのだ。

壁にかかっている少々長めの剣を持ち構える。こんなの、ゲームとかだったら意外とあっけなく勝てちゃうんだろっなあ…
などと馬鹿なことを考えつつ呼吸を整える。

鍵が壊れる音がした後、勢いよく扉が開く。

「???」よくもこんなに手こずらせてくれたわね!」

蓮「あいにくそっちが勝手に手こずったんだ。」

「???」よく言っわ盗賊の分際で!」

蓮「念のため言っとくけど俺盗人じゃないから」

「???」盗人はみんなそう言っのよ!」

彼女は再びレイピアを抜く

完全にキレてるなこりゃ……………ん!?——ヤバイ——!!!

本能が危険を察知して後ろに飛んだ瞬間、俺の右肩があつた位置にさっきのとは比べ物にならないほど強力な突きが打ち出されていた。

「???」なっ!? 意外とやるじゃない……」

なんて速さだ! あんなの普通にやってたら避けれるわけないだろ。あつちは今のをよけた事でかなり警戒してくれてるからいいとして、実際左腕が殆ど使い物にならないのは今わかった。

後ろに飛んで全身に力が入った瞬間左腕だけに力が入らなかった。

死に物狂いで逃げていたから気がつかなかったが、血をだいぶ流しすぎたようだ。

剣を握っている手に力が入らない。

今にも落としそうになる。

それを堪え目の前の敵を見据える。

しかし迂闊に攻撃してこなくなったのはいいが、かわりにレイピアを片手で持ちもう一方の手の平を上に向け何か呟いている。

……非常に考えたくないが、まさか…魔法とやらですか??

あのやろっ一般市民に向かって何という事を…

ってか、ここ魔法使えるんかい!!

どうすんだよ…もし魔法だしたらあんなもん防ぐなんて俺には無理だし。

もしも「あれ」がゲームや漫画みたいな威力だったら俺確実に…死ぬよな…?

???「覚悟しなさい!」

そう言っ準備ができたのか、さっきまで上に向けていた手を俺の方に向けてくる。

ヤバイ…なんとかしてあいつの気をそらさねば…

蓮「どうでもいいがアンタさっきから似たような事しか言ってないよな…」

???「う…うるさいわね!!!貴方」

俺の言った言葉に怒ったのか、彼女が何かを呟いたとたんに俺の持っていたはずの剣が地面に落ちる。

蓮「えっ……」

急いで拾おうと腕を伸ばしたがその時目に入ってきた光景はズタズタに切り裂かれている自分の右腕だった。

???「次は首にあてるわ。観念しなさい」

この野郎…何をすました顔で言っただ…かまいたちで切ったみたいに痛くはないが傷が深すぎる。

見たくもない自分の腕の肉が完全に見えてしまっている…

血は止まらず流れ続けているし第一こんなもん首に当てられたら…

……

絶対 に 死ぬ だろ。

なんだこいつは、こんなに簡単に人を殺す気なのか？

ふざけやがってこんな所で死んでたまるかよ。

ろくに動きもしない左手で傷口押さえ相手を睨みつける。

あいつは一瞬だけ躊躇うような表情を見せて、もう一度手をこちらに向けてきた。

???「さよなら……」

その瞬間、扉の外から甲冑を身に纏った騎士のような人物が疾風の如く飛び込んできて、すばやくあいつの腕を払い違う方向に向けさせる。

もしもこの甲冑の騎士が一秒でも遅れていたら、確実に俺の首は胴体と別れを告げる事になっていた。

なぜなら、彼女の放った魔術は、横にあった石柱を軽々と真つ二つにできていたのだから。

???「ちょっと!!何するのよ!」

???「いやいや。こともあるうに学園の生徒さんが、一般市民を襲っているとの通報があつてな。」

???「なにが一般市民よ!!!そいつは武器庫の中にいた盗人なのよ!」

???「本当かい?通報と違うじゃないか」

驚く俺を尻目に口論する二人

俺は…助かったのか?いまいち状況が掴めんが…もう限界…だ。

???「ん?あらあら、こりゃあちつとやり過ぎだな。出血多量で死ぬぞ…こい…つううう!?!?!?!?!?」

???「何よいきなり大声出して、何かあつたの騎士団長さん?」

???「……………俺の……………息子だ。」

???「……………はっ?」

一日目（中）

目を覚ますと白い光が目に入ってきた。

頭がボーっとしたまま、習慣的に携帯を探す。

だがいつもあるはずの携帯が無く、手を伸ばした先にふさふさとした触り心地の良いものが、指先に触れた。

さわり心地が気に入り何も考えずしばらく触っていると、いきなり動いて手を払いのけられる。

???「何勝手に人の頭触ってんのよー！ー！！！」

………どんな目覚ましよりも強力な目覚ましだ。

おかげで一氣に目が覚めた。

しかし…なんで俺は生きてるんだ？

そしてここはどこだ？自分の体を見つめ直してみる…完全に治療されている。

両腕の傷は完全に治癒している。

いろいろ不思議に思っていると、俺の心がわかったのか、ため息を吐いてから彼女が口を開いた。

???「はあ…貴方、状況が理解できてないみたいね。……いいわ少しだけ説明してあげる。」

…まず俺を殺そうとした人物が目の前にいる事自体が非常に不可解

だったが、こちらとしても情報は欲しいので黙って聞く事にした。

「……まず貴方が生きていてください。これは騎士団長に邪魔されて私が止めを刺し損ねただけ。今も貴方を殺さないのは……私の勘違いだったからこれはいいいわね？」

いいものにも始めからこちらは無実だといってゐるのだが……しかしそんなことを口に出そうものなら即座に手厳しいツツコミが来ることが容易に予想できたのでやめておく。

「次に貴方が居る場所だけど、ここはリーベル王国の城の中で、ここはその医務室みたいなもんよ。因みに貴方の体の傷が治つてることだけどこれは説明するまでも無く、単純に魔術のおかげよ。

L

こいつ…今なんて言った？『単純に魔術』？？なんなんだよ魔術って？何？俺が変な本のせいで連れてこられたのは、本当に魔術とかゆうRPG的なものが使えるところだという事かよ…

ふう……最悪だ。今更だが、何で俺はこんな所にいるんだと自問自答のしすぎで頭が壊れそうだよ、クソツ……

「???」もう少ししたら騎士団長もくるから待ってなさい。話があるらしいわ」

こいつもそう言ったきり俺と会話どころか目を合わせようともしない。

どうしたもんかと首を傾げていたら、急にドアが開き中年のおっさんが、はいつ……てえええええええ！?!?!?!?!?

なんだこいつ…異常に見覚えがある。というかてめえは、俺が中学のときに蒸発したクソ親父じゃねえか。

硯玄「おおゝ久しぶりだな蓮、僕の事覚えているかな？」

ああ覚えてるとも…俺の誕生日に新発売のゲームが出るってんで、頼みに頼み込んでようやく買って貰えることになった誕生日当日に蒸発しやがって…

おかげでこっちは、てめえの帰りを一夜明けて雀が鳴き始めるまで待ってたんだぞ？

そこから俺が生きてくのがどれほど大変だったと思ってたんだよ…

そう思っているこっちは裏腹に満面の笑みで背が大きくなったなゝとか抜かしやがる。

???「ところで団長、彼はなんであんなところにいたのかしら」

硯玄「ん？ああ、それはきつと僕があつちの世界において残しておいた緊急用の魔術兵装を使っただろう。」

???「よくわからないけど、彼はどこか遠いところにいて偶然にも魔術兵装を間違えて使ってしまったということね」

硯玄「まあ、そんなところだよ。それと悪いんだが少しだけ席を外してくれないかエリス、二人で話したい事があるんだ。」

エリス「いいわよ。それじゃ30分ぐらいしたら戻るわね」

エリスと呼ばれた彼女は静かに立ち上がり、部屋を出て行こうとしたとき急に何を思いついたのか親父がエリスになにやら耳打ちをしている。

その後すぐにエリスは部屋を出て親父は俺の横にある椅子に座った。

蓮「親父…今更昔の事を言つつもりはねえ。だからかわりに…」

昶玄「この世界の事を教えろ。だろう？」

俺の言おうとしてたことがわかるなんてな。さすが親父だ…いつも抜けてる所があってもここ一番の時はやっぱり鋭い。

蓮「ああ。ここはなんなんだ？魔法は使えるわ、剣だの鎧だのとまるで…俺の好きなゲームみたいじゃないか」

一番疑問に思っていた事を訊ねる。

宗玄「ゲーム…か、確かにここはそう感じるかもしれないが、あつちの世界と同じ現実だ。」

蓮「じゃあここは、なんて所なんだよ？」

昶玄「この世界はヴァンヘルムといってね、まあ早い話が蓮が元々いた世界とは違う異世界なんだよ。」

いきなり衝撃的な事実を突きつけられる。

——ふう…もしこの会話を俺が元の世界にいるときに聞いたら、なにめちやくちなこと言い出してんだよ…

と聞く気にもならなかっただろう、しかし本当に異世界とやらに来

ている以上、真実なのだと受け入れる事しか出来ない。

昶玄「蓮がこつちに来た原因は僕があつちの世界に残しておいた一種の魔術兵装なんだよ。」

え〜っと、解りやすく解釈すると親父が俺がいた世界にテレポカード的なものを残しておいたらしい。

蓮「聞きたいことがある……」

今までのことを大体聞いて疑問点が一つある。俺にとっては非常に重要な問題だ。

昶玄「なんだい？とりあえず何でも答えるよ」

蓮「…俺は帰れるのか？」

昶玄「…すまない。現状では蓮を元の世界に戻す事が出来ない。」

まあ…想像はついたけどさ。

蓮「こつちに来たときみたいに何かないのかよ？」

昶玄「あの魔術兵装はこちらに対象物を送る事だけが目的だから帰ることは出来ないんだ。そして帰るための魔術兵装は…壊れてしまつてね。僕も今のところ帰る手段が無いのさ」

はは、と苦笑いを浮かべながら話しているがこれは笑い事じゃない気がする。

確かに俺は退屈な日常が変わればいいと思っていたが、まさかこん

なに唐突に、しかもこんなに激変してしまうとは…

そうしてお互いに話す事がなくなった時ドアが開いてエリスが戻ってきた。

エリス「どう？話は終わったかしら？」

部屋に入って俺と親父が話していた横に来て何やら親父に話している。

覗玄「ふむ。わかった、それじゃあ蓮行こうか。」

蓮「はい？何？どこに行くんだよ？」

そう言うのと親父はいいからいいからと、俺を立たせついて来るように言いエリスと一緒に部屋を出る。

まあ、このまま部屋に残されても困るので仕方なくついていく事にした。

部屋を出るとまたあのクソ長い廊下だ。一体どこに行くのか不思議に思いつつ、親父たちの後をしばらくついて行くと観音開きのドアがあった。

覗玄「まあとりあえず、入ろうか。」

親父がドアを開けるとそこには様々な形の道具が置いてあり、ちょうど部屋の中央に黒いローブを着た人が立っていた。いかにもって感じだ…

俺が見た事が無い光景にボーっとしているといきなり親父が何かを手渡してきた。

丸い水晶玉だ。大きさはハンドボールくらいで、とても綺麗に透き

通った透明色である。

蓮「なんだよこれ？」

突然渡され使い方も何も解らないのでとりあえず聞いてみることにした。

昶玄「それは選定の玉といってね、自分の魔術属性を知るためのものさ。使い方は簡単。ただ持つてるだけでいい」

属性：火とか水とかそんなもんだろうか？そう思いながら手にしている水晶玉を見ていても何も変化は無い。

それどころか段々、親父とエリスの顔つきが変わってきてローブを着ている人なんかはどうゆうことだ、と焦っている。

エリス「嘘でしょ？なんでもなんにも反応が無いの？」

エリスが信じられないといった表情でこちらを見ている。

なにがそんなに変なんだ？別にそんな属性が無い奴がいたっておかしくないんじゃないかと思っていると、親父が急に説明しだした。

昶玄「いいかい蓮。魔術属性は万物全て本来必ず一種類はあるんだ。ほら」

親父が手を伸ばし俺の持つ水晶玉に触ると茶色に色が変化した。

昶玄「僕は、土属性。そこにいるエリスは風といったように、属性は必ずあるはずなのに…」

……なんだおい、俺には属性が無いってどうゆうことだよ…

蓮「さつきだれにでもあるって言ったじゃないか。」

硯玄「ああ。普通ならあるはずなんだが、どうやら連には何故か無いみたいだね…」

蓮「まあ…別になくてもいいけどよ。無いと不便なのかよ？」

別にそんな属性がないからといって何かが変わるわけじゃあるまいし、どうでもいいのだが。

硯玄「…属性が無いのは魔術が使えないことを意味するんだ…」

いやいや別に俺は魔術が使えなくてもいいんですが……そりゃ、ちよつと残念だったりするけど…

エリス「これはどうなの？」

親父が深刻な顔で色々考えている間に、エリスが何か手渡してきた。小さい玉で鉄みたいな感じの色をしている。

蓮「これは？」

エリス「貴方に魔力がどれだけあるかを教えてくれる道具よ。それを握り締めて、自分の力をそれにこめるイメージをしてみてください。」

言われた通りに目を閉じ自分の力をこの玉にこめるようにイメージする。

…何も起きない？これでいいのだろうか？

蓮「なあ何も起きないがこれでいいのか？」

エリス「いいわよ、その玉をちよつと貸して貰えるかしら。」

そう言うところエリスは俺の手から玉をひょいと掴み、これまた変な道具にセットする。

どうやらあの手に持つてゐる変な道具の方でわかるようだ。

エリスは始めニコニコしながらその道具を見つめていたがいきなり顔色が変わり、なにやらブツブツ言い始めている。

硯玄「どうだいエリス？魔力はあるんだろう？」

考えごとが終わったのか、親父もエリスの方に行き道具を見る。そしてまた信じられないといった表情で道具を見つめている。

硯玄「蓮…あつちの世界にいるときに何か魔術関係のものを使ったのかい？」

親父がまるでそうであつて欲しいといわんばかり言い方をしてくる。しかし俺はつい数十時間前まで普通の高校生だったのだ。そんなもん使うわけがない。

蓮「いや、そんなもんはここに来たときのあの本だけだけど？」

硯玄「だよねえ…まあ仕方ない。魔術属性はわからないけど蓮には一応魔力があるんだし。」

そう言つて親父は俺に再びついて来るように言いエリスと二人で外に出ようとする。

その後ろで困ったようにローブを着た人が後片付けをしている。
非常に申し訳ないのだが、俺も早くついていかないと置いていかれ
そうなので一言だけ礼を言っすぐに部屋を出た。

どこに向かっているのだろう。

あの部屋を出てもう五分ほど歩いているんじゃないだろうか？
城とはこんなに広いものなんだろうか？いくらなんでも広すぎのよ
うな気がする…

そんな事を思っていると滅茶苦茶大きな扉が見えた。
蓮「なんなんだよあそこは？」

硯玄「この国の国王がいるところだ。まあ一応礼儀正しく頼むよ、
連」

エリス「かりにも王様と会ったからちゃんとしなさいよ？」

二人によるとどうやら俺は王様とやらに会っらしい。
そっか、よく考えたらここは王国なんだもん。王様がいて当然か。

というか、王様に会ってまさしくあれだよな…RPGみてえ…

なんて考えていたら、いよいよ扉の前についた。
いかにもという感じの扉を親父が開ける。

その先にいたのは、豪華な椅子に座っている王様だった。

俺達は一礼して中に入る。

部屋の中央辺りまで歩いたかと思うと、いきなり親父とエリスがか
しずく。

俺は何がなんだかわからず、二人の見よう見まねでかしずいてみせ

る。

王「そんなにかしこまらなくともよいよい。それで先ほどエリスから聞いた話の件だが…本当かね？」

王様はお決まりの台詞のようなものをつた後親父に向かって何か話している。

昶玄「はい。今横にるのが私の息子です。それで…やはり駄目なのでしょうか？」

親父が珍しくかしまった口調で話しをする。一体何が駄目だというのだろうか？

やっぱり俺はここにいちや何かとまずいのだろうか？

王「いやいや、構わんよ。その子にしても住むところもないままじや大変じゃろうて。わしが全部やっておくから準備をして、そのまま行つて構わん。」

王様が何かを許したかのように言うと言親父は少し安堵したような表情になった。

昶玄「はっ。ありがとうございます。それでは早速。」

そしてお礼を言つた後親父はエリスと俺を近くに呼び、何やら唱えている。その呪文が唱え終わると同時に俺達は眩い光に包まれた。

うわ気持ち悪いなこの感覚…何回やっても多分なれないだろうな俺・

・

身を包んだ光が消えて俺が目にしたのは活気のある町だった。
どうやら転移？（俗にゆうテレポ的な）をしたらしい。

エリス「ふう…ところでなんで私までこんな目にあってるのかしら？」

颯玄「まあまあ、蓮はこっちの事何も知らないんだからエリスちゃんに教えてあげて貰いたいんだよ。」

エリス「なんで私が教えなくちゃいけないのよ。団長が教えればいいんじゃないの？」

颯玄「いやいや、歳の近い子同士の方が何かと解りやすいだろう？」

エリス「あーもうっ！わかったわよ。」

どうやら話が終わったみたいだ。エリスが先行して歩く。
どこに行くのだろうか？

蓮「なあ親父、どこに行くんだよ。」

颯玄「なあに、ただの買い物さ。ほらお金。大事に使ってくれよ？」

親父はそう言っただけに札束を渡してきた。

日本円じゃないのは十分に予測できていたけど。

お札のところに10000Zと印刷されている。

蓮「何だよこれ？」

覗玄「この世界での紙幣さ。ゼニーっていうんだよ。」

へえ…じゃあ、ええっと今俺が貰ったのは…ひーふーみーの…30万ゼニーってことか？

多くないか？日本円で考えても多いぞこれ…

覗玄「たくさん買い物するからね。それで足りるかどうか…」

マジかよ…何買うの？ってかそんなに金かかるような買い物するの？

エリス「その二人〱置いてくわよ。」

親父とお金の使い道について話していると、先に歩いていたエリスから声がかかる。

待たせるわけにもいかないので、急ぐことにした。

〱商店街〱

エリス「ほら着いたわよ。最初にどこから行くの？」

商店街のようなところに着いた。

いや〱やっぱり異世界って凄いわ…道に剣とか鎧とかファンタジー的なもんがいっぱい並んで売られてるんだもん…

覗玄「とりあえず…一番必要な武器からにしようか。この辺で一番いい所わかるかい？」

エリス「お任せあれ！この辺りだと確か…その曲がり角の一番奥

だったはずよ。…高いけど」

颯玄「じゃあ早速そこに行こうか。」

エリスが先行して曲がり角を曲がり奥へと進んでいく。

いやしかし凄い…ゲームの中でしか見れない剣士みなのとかが、
いっぱいいるよ。

そうしてキョロキョロしながら進んでいくと古臭い一軒の建物があった。

迷いなく入っていく親父とエリス…なぜあんなにすんなり入れるの
だろうか。

なんか…ここ怪しいですよってオーラが出てる店に…

颯玄「ほら…行くよ連」

親父に促され俺も中に入る。

店主「いらっしやい。今日は何用で？」

店に入るなりじいさんが、出迎える。

颯玄「この子に合う武器はあるかな？」

親父が俺の方を指差しながら店主にいろいろ説明している。

店主「うゝむ…魔術が苦手ならのなら杖などの系統では駄目じゃな
…」

爺さんがなにやら店の奥に入っていつてしまった。

蓮「親父なんだよ？武器って？俺何かするのか？」

何ゆえ俺が武器など持たなくてはいけないんだ。
俺そんなもん持たされても何も出来ないんだが…ついこの間のエリスとの戦闘でそれを痛感したんだが…

颯玄「この世界じゃ町を出ると魔物の類に襲われる時があるからね。自分の身を最低限守るものは必要なのさ。」

マジかよ…何？魔物まで出るのかよこの世界は…

エリスの方に視線を移すとレイピアを抜き、こうゆうのが必要よ？と目で語りかけてくる。

嫌すぎる…俺は武道の経験なんか無いしここにあるような武器は、ゲームの中でみたことがあるというものが殆どだ。

使えるわけがない…

ましてや魔物がいるということは外に出ると、いつ殺されてもおかしくないってことじゃないか。

改めて実感した…俺はもう安全な世界にはいないんだということを。

俺が諦めて店内にある武器で使いやすそうなものを探しているいろと見ていると爺さんが奥から出てきた。

手には何か中くらいの長さの剣のようなものを持っている。

店主「この剣あたりが手頃じゃろう。」

親父はその剣を一度抜きよく確認してから、これを貰うよといって金を出す。

俺はその剣を受け取り背中につけて貰い店を後にする。

その後はもう大変だ…魔術用品などいろいろ買って気がついたら夕暮れという状況なのだ。

さんざん買い物した後エリスは用があるといって一人で何処かに行った。

俺はというと親父がまたついて来いというので親父の後ろをさつきから歩いているわけなのだが…

どこに向かってるんだろ？

蓮「親父どこに行くのさ？」

昶玄「蓮がこれから寝泊りするところさ」

親父がそう言って歩いている後ろを歩いていると、ドデカイ敷地の学校みたいなところが見えてきた。

何だあの広さは…異常じゃないか？

昶玄「あそこが魔法学園レイナード。エリスも通っている所だよ」

魔法学園…なんだ？俺はあそこで某魔法使いのハ。ーみたいに修行するのか？マジかよ…

でも親父寝泊りするところって言ってなかったか？……まさか、な…

昶玄「この学園は全寮制でね。さっきの王様との会話はこの事についてだったんだよ。」

蓮「金とかはどうすんだよ。親父そんなにあるのか？」

昶玄「ああ。これでもなかなか稼ぎがいいんだぞ？」

などと無駄話しながら敷地内に入っていく俺……今思えばここから俺の不思議な学園生活が始まったんだ。

一日目（後）

中に入ると俺が今まで通っていた高校と広さなどの規模は違うが、外見は似たようなものだった。

親父が校長とやらと話している間俺は自由に校内を回っていいことになった。

さっそく廊下を歩き出す。

蓮「しかし広いな。俺の通っていた学校の何倍だ??」

辺りを見渡すと聞いたことも無いような名前の部屋があったりして少し怖いが、いろいろ歩き回ってみる事にしよう。

自分がいたところから一番近い教室を覗いてみると意外な事に普通の学校ぽかった。

ほかにもいろいろ見て回ったが生徒らしき人物は見当たらず。立ち入り禁止の看板が多いため見て回るといっても大体の構造を把握しただけで、

しっかりと細部までは見る事が出来なかった。

まわった感じでは、この学園は二つの棟に分かれていて学園の東側にあるのが寮棟で、主に寝泊りするところのようだ。

そして西側にあるのが校舎で主に授業などはこちらで受けるのだろう。

中庭にもいろいろな建物があるが、そちらはどうやら今日は入れないようだ。

そしてここはどうやら屋上の立ち入りも許可されているようだが、扉を開けて覗いてみると。やはり誰もいないので、とりあえず今日のところは屋上に立ち入らず親父のところに戻る事にした。

ところが職員室らしきところに戻っても、親父はおらず代わりに先ほどの校長がいた。

校長「まっていたよ。蓮君だったね。さあ今から君の部屋に案内するからついてきてください。」

俺に優しく笑いかけながらそう言っただけでスタスタと歩き始める校長。親父はどこに行ったのか後を追いつつながら聞くと、急な仕事が入って直ぐに行かなくなっちゃならなかったらしい。

まったく、どんな仕事してるんだか…

そんな事を考えながら歩いていると、そのうち視界に入るのは長い廊下とその左右にドアがあるいかにも寮ですよといった感じのところだ。

校長「ここが君の部屋だ。」

そう言われ校長に案内されたのは、廊下の一番奥の少し他とは違うドアの前だ。

後は君の自由に使っていていい。明日は9時に職員室にくるように言い残し、校長はさっさと帰ってしまった。

早速中に入ってみるとそこは、なにこれ??どこのホテルですか? びっくりするくらい広く住み心地のよさそうところだった。

蓮「すっげー家具とか全部揃ってるよ。ベットも…なんだこりゃ?

ダブルサイズ並みに大きいベットだ…」

部屋の中をいろいろ漁りながら、何がどこにあるのかを大体把握した。

ひと段落ついたので少し休もうと思いベットに座る。

今日一日…かなり疲れたな。ん？今日一日？？

あれ？俺がこっちに來たのってPM7時くらいだろ？なのにこっちに來たのは、どう考えても昼ぐらいだよな…買い物に行ったとき晴れてたし、あつちとこっちじゃ時間の流れる速度が違うのかな？まあどうでもいいんだがな…

しかしここに来たとたんに殺されかけるわ、超常現象ばかり目にするわでな…なんていうか…うん。精神的疲労が大変ヤバイな…ボーンとしながら時計を見るとちょうどPM7時半だった。

あゝ、俺時差ボケとかに弱いんだな…ねみい。
今日は疲れたし別にもう寝てもかまわんだろ。

体中疲れ切っていた俺はベットのの中に潜り込むと、深く心地よいまどろみの中に意識を沈めた。

二日目

・
・

—— 夢を見た。

夢といっても友達がどうしたというような夢ではなく…そうそれは、ただの映像に近かった。

幼い自分が、なにやら黒い靄みたいなものと一緒にいる映像だ。

—— 急に頭に激痛が走る

痛い——

とてもじゃないが、夢のことに意識を傾けてられない…

—— そこで俺の意識は途切れた。

・
・

蓮「……、ハア…ハア…」

いきなり飛び起きる俺… なにか嫌な夢でもみたのだろうか？
全身が汗でびしょびしょになっていて凄まじい不快感に襲われてい

る。

どんな夢を見たのか思い出そうとするが、まったくもって思い出せない。

仕方ない…窓を見るともう明るいが昨日言っていた時間には、まだまだ余裕があるだろう。

シャワーでも浴びるとするか。

ベットを出て浴室に行き、手早くシャワーを済ませる。

上がった後は朝食を作るためにキッチンへと向かう。

えっ？なに？食材？なんかあるのかって？

大丈夫、大丈夫昨日ちゃんと買っておいたから。俺はこうゆうところ抜かりないんだぜ。

と思うが…何を作ろうかな…

しばらく考えた結果、時間も時間なので簡単にトーストと目玉焼きにした。

まあ…旨い。つつかこの2種類をまずく作れる人間なんかいないだろ。

いやむしろ飯にいたとしたらある意味天才なんじゃなかるうか？

食べ終わり、食器などを片付けて時計を見る――9時。

……やべっ。

ドアを破壊しかねないぐらいの勢いで部屋を後にする。

余裕ぶっこきすぎました。

風呂から上がった時に確認するべきだった…

なに優雅に片付けてんだよ、

ちくしょおおおお！！！！

廊下爆走中…

～職員室前～

ときたますれ違う生徒に変な目で見られながらも、やっとの思いで職員室に到着した。

普段あまり運動しないからかなり疲れた…全力疾走で五分以上かかる所に職員室あるとか…どんだけ鬼畜なんだよ…

とりあえず…入ってみるか。

蓮「失礼します。昨日校長先生に呼ばれたんですが。」

ノックをして中に入ると一人の女性が話しかけてきた。

???「あらあら～貴方が私のクラスに来る転校生さんかしら～」

異常にゆったりした口調で話す女性。まさかこの人が俺の担任なのか？

っていうか…なんだそのけしからん服装は。

その女性が着ている服は黒を基調とした胸元が大胆に…いやもう見えてるっくらいに、ギリギリまで開いたドレスのような服だ

逆にこっちが聞きたくなる。本当に教員なのかと…

アイーシャ「あ～自己紹介がまだでしたね～。私は～貴方の担任に

なるゝアイーシャと申します。」

担任だった…嬉しいのか不安なのかよくわからんが、こちらで自己紹介せねば。

蓮「俺は、篠宮 蓮です。よろしくお願いします。」

アイーシャ「蓮君よろしくねゝそれじゃゝ早速教室に行きましょうかゝ」

先生はそう言つと俺を連れて職員室を出た。

しかしなんか緊張するな、一体どういつ風になればいいのだろうと、歩きつつ悩んでいると先生が立ち止まった。

アイーシャ「ここがゝ教室よゝ」

教室の中の雰囲気窓の外から覗いてみる。

皆さん担任がいらないからといってはしゃいでらつしやる様子だ。

その中に一人…机に向かって本を読んでいる、見覚えのある人物がいた。

—— エリスだ。こともあろうに俺はどうやらエリスと一緒にクラスになつちまつたようだ。

いろいろと複雑な気分だが、いつまでもここに居るわけにはいいかな。

先生に先に入ってもらい俺が後から続くようにして教室に入る。

俺というこのクラスの生徒にとってはイレギュラーな存在が入ってきた事によつて教室は一気に静かになる。

やべえ…プレッシャーで死にそう…みんな興味深々の視線を送つて

くるので、今にも心臓が破裂しそうだがそれを堪えて軽く自己紹介をする。

アイーシャ「みんな仲良くね」蓮君の席は「エリスちゃんの隣が空いてるから」エリスちゃんの横でいいかしら」

マジか！しかしこんなの当然エリスが反論してくるだろうと思い、エリスの方をチラッと見てみるとあいつはニツコリとした笑顔で「ええ。いいですよ」

って言いやがった。エリスってあんなキャラだったっけ？

なにやら黒いものを感じずにはいられないが、とりあえずエリスの横に行き「よろしく」と声を掛けると「仲良くしましょうね。」などと返された。

なんだこいつ？なんかキャラが最初に会ったときと全然違うような気がするんだが。

まあ…別にいいか、とりあえず席に座るとアイーシャ先生がいくつかの連絡事項を話して教室を後にしていた。

俺はというとエリスと何か話すなんてことはなく、転校生に必ずと言っていいほど行なわれる質問攻めを食らっていた。

前はどこの学校にいたの？とかどのくらいの魔術が使えるの？とかそれはもう回答に困る質問攻めだった。

答えようにも本当のことを言う訳にもいかず、困っているとエリスの奴が俺の代わりに色々と皆に説明してくれた。

こいつ意外といい奴なのかもしれないな…

エリスが質問にくる生徒の半分ほどに適当な回答をしていると、チャイムが鳴り。

皆、席に座っていく。それと同時にクラスに入ってきたのはどこに

でもいそうな中年親父って感じの奴だ。
こんな奴も魔法使いなんだからびっくりだよな…

どんな授業が始まるのか正直楽しみだった。いろいろ想像していたのと違った部分もあったが、授業を聞いているとこの世界のことが少しわかってきた。

魔術と魔法は別物ということや、魔術属性の相性などわからなかった事も解決したのでよかったと思う。

どうやら今日は、この午前の授業だけで終わりらしい。
席に座りながら先生の話をボーッと聞いていると、不意に横のエリスから話しかけられた。

エリス「あんたこの後暇よね？暇ならちょっと付き合いなさい。」

蓮「別にいいけど…何かあるのか？」

エリス「いろいろとね…とりあえずこの話が終わったら剣を持ってこの学校の訓練場まで来てくれる？」

なんとなく読めた気がする。剣を持って訓練場ということは、何か特訓的なことをするのだろう。

こちらとしても魔術の使い方も教えて欲しいので快く承諾した。

蓮「わかった。一階の奥にある部屋だよな？」

エリス「そうよ。私は先に行ってるから支度したら早く来なさいよ。」

少ししたら先生の話も終わり。俺は急いで自室に戻る事にした。
途中いろんな人から挨拶された、なんかあんまりこうゆつの経験な

いからちよつと恥ずかしいな…

〈自室〉

蓮「え〜つと。剣持ってつと」

昨日買ってもらった剣を背中に担ぎ自室を後にした。きっとエリスの奴怒ってるだろうな…

〈訓練場〉

エリス「遅いわよ！待ちくたびれちゃったじゃない。」

蓮「ごめんごめん。いろんな人に挨拶とかされてさ。」

とりあえず遅れた理由を説明しておく。

エリスはどうやら納得したみたいで、機嫌が普通に帰ったみたいだ。

エリス「私があんたをここに呼び出した理由はわかるわね？」

エリスが俺の顔を覗き込むようにジッと見つめながら問う。

蓮「もちろん。剣術の訓練とかだろ？なんか最後の先生の話じゃ近いうちに何かイベントみたいなもんがあるらしいしな。もしかしてそれに向けてか？」

自信満々に答える。

エリスは複雑そうな顔して半分正解、と言った。

エリス「そう。確かに貴方の訓練に来たのは正解よ。だけどね一週間後に開催される全校サバイバルは貴方がどんなに頑張って訓練し

ても意味がないわ。」

なぜだろう。ってか全校サバイバルって何なのだろうか？

蓮「なあ、エリス全校サバイバルってなんだ？」

エリス「さっき先生が言ってたイベントの事よ。半年に一回この学園の序列を決めるために行なうの。当然序列が高いほど様々なところでの発言権の大きさとかも違うわよ」

なるほど…大規模な力比べってことか。ん？何で今からじゃ俺がそれに向けて訓練しても意味がないんだろうか？

蓮「それはそうと、何で今からだとそれに向けての訓練は意味ないのさ？」

俺がそう言つとエリスはあきれたような顔をして答えてくれた。

エリス「なんでってそりゃ、あんた…属性もなくて魔術もろくに使えない、さらには近接戦闘のスキルもない奴が生き残っていけるほど今回のサバイバル戦は甘くないのよ。私が今ここに呼んだのだから、貴方に必要最低限の剣術を学んで貰って、自分でお金を稼げるようにしてあげるためなんだから。」

蓮「あゝそういうことか…なんだ属性が決まっていなくて魔術も使えないのか…わかった。サンキュなエリス。早速だけど俺は何すればいいんだ？」

どうやら今日はエリスが俺の生活の事を考えて提案してくれたようだ。ありがたい

エリス「それじゃとりあえず…その剣を何回か振って貰えるかしら？癖とかいろいろ見たいし。」

エリスが俺の背中にある剣を指差しながら言う。

俺は、背中に背負っている剣を外して鞘から抜き、言われた通りに何回か振ってみる。

それを見たエリスは、またため息をついて俺が振る剣を見ながら何やらブツブツ言っている。

なにかいけないことでもあったのだろうか？

しかし…剣って意外と重いな…まだ十数回くらいしか振ってないがもう腕が疲れてきた。

蓮「ハア・・・ハア・・・どうだ？」

エリス「全然駄目ね…素人丸出している感じよ。魔術が使えないのに剣術も駄目だったら笑い話にもならないわ。今から少しお手本を見せてあげるからしっかり見てなさいよ。」

そう言うときエリスは腰にあるレイピアを抜き、舞うようにそれを振り始めた。

——美しい。

その舞を見た率直な感想だ。

エリスのレイピアが虚空に描く剣筋は、ときには鋭くまたときには柔らかく、綺麗な剣筋を描いていた。

おもわず見惚れてしまった。

エリス「ふう…こんな感じよ。どう？見てて何か掴めたかしら？」

エリスがレイピアを鞘におさめながらこちらに歩いてくる。

ふとエリスの顔を見る。疲労の色はまったくなさそうだ。あれだけの動きをして汗一つかいていないのは凄い…こっちなんかたった数十回振っただけで結構疲れるってのに…

エリス「聞いているの？どうなのよ？」

蓮「ああ。お前の動き見る限り要するに俺には基礎体力の欠如と剣を振るときに余計な動きが多いってんだろ？」

とりあえずエリスの動きを見て感じたことを述べる。エリスの顔を見る限り間違いではなさそうだ。

エリス「なんだ。よくわかってるじゃない。それじゃ今から剣を振るときの余分な動きを無くす特訓するわよ。体力なんかは特訓したら勝手につくし。」

エリスはそう言う俺に竹刀のような模擬刀を渡してきた。

蓮「なんだよこれ？」

エリス「模擬刀よ？」

蓮「そうじゃなくって、これで何するんだよ？」

エリス「私と打ち合うのよ。今日は私にそれを一回でも当てたら終わりにしましょうか。」

蓮「待て。本当にやるのか？お前一応女だろ？」

俺がそう口を滑らした時、周囲の温度が一気に何度か下がったような気がした。

エリス「そうね…私も　一　応　女ですし…貴方が私に一発でも当てられたら止めてあげるわ…」

蓮「！！がは…っ」

瞬間。俺の胸に激しい痛み。おもわず膝をついてしまう

今の一瞬で胸を突かれていた。――ヤバイ、どうやら俺は言うてはいけないことを言っただけらしい。

エリスの目がマジだ。初めて会った時の数倍恐ろしい威圧感がある。

いそいで竹刀を構え、エリスの方に向き直ろうとしたが、そんな俺の目に映ったのは、脳天めがけ振り下ろされるエリスの竹刀だった。

部屋中に鈍い音が響く。

蓮「いつってえええ！」

エリス「よそ見をする貴方が悪いのよ？ほら早く立って。次いくわよ。」

結局この日俺はエリスの放つ攻撃の速さについていけずボツボツにされた。

（自室）

蓮「いってゝ。エリスの野郎…本気だつたるありや…うわ…あちこちに痣できてるし…」

只今自室のベットの上にて休息中。とてもじゃないが、もう動きたくない。

あゝ…明日は授業出たくねえ…

この後ベットから起きる事はなく、この日はこのまま気づいたら寝ていた。

三日目（前）

目が覚める。外は快晴で朝日が眩しい。

時間を確認すると今がちょうど出席をとっている時間だ。

今から行ったところで遅刻だろう。

今日は授業を受ける気分じゃないしな…体も…ってあれ？

—— おかしい…昨日寝るまではあんなにあつた痣が一つも見当たらないし痛みもしない。

かなりひどい青痣になつたのもあつたのにな…まあ体が動くならそれでいいか。

とりあえず朝食をとる事にした。といってもまたトーストと目玉焼きなのだが。

食い終わるころには、だいぶ時間がたっていた。

特にすることもないので校内をふらふらすることにした。

廊下に出てみる—— うん。誰もいない。

いろいろ回っていると廊下を歩いていた教師に見つかった。

教師「ん？おい！！お前こんな時間になにしてる！！どこのクラスだ！」

ヤヴァイ…怒った口調ながらも少しニヤついた表情でこちらに近づいてくる教師。そいつはどう見ても体育会系の体つきをしていて尚

且つ、上下ツナギを着ている。
第一印象はガチホモだった…

蓮「おいおい…俺はノンケだぞ…」

とつさに身の危険（主に貞操）を感じ教師とは反対方向に全力疾走で逃げる。

教師「！！お前逃げるのか！待てコラア！指導室まで来い！！」

俺が逃げるもんだからあつちも当然追いかけてくる。ってか指導室
ってそんなとこにいけるかつつの。何されるかわからんし。
それに待てといわれて待つわけにはいくまいよ。などとありきたり
な事を考えながら逃げていると、奥にある階段が目に入る。

あれは確か…屋上に繋がってたはずだよな…あんな逃げ道のないと
ころに行ったらヤバイ気もするが、すぐ真後ろにあのガチってる奴
の気配を感じたので、なりふり構わず屋上へ。

く屋上く

蓮「うおおおおお！！！」

屋上の扉を開け、すぐにまた閉め鍵を掛ける。

あぶなかったく間一髪セーフだ。扉の向こうからは「開けるく！！」
という怒気の籠った声が聞こえてくるが、あれは無視しよう。うん。
下手に開けたらそれこそ人生の終わりの気がするしな。

扉を背にして屋上の真ん中の方に目を向けると、一人の小柄な少女
が寝ていた。

なんだ？こいつも授業サボったのか。しかし気持ちよさそうに寝てるな

真ん中で気持ちよさそうに寝ている少女に近づく。あまりにも気持ちよさそうに寝てるからな。ついつい悪戯したくなるんだよね。とりあえず顔の前で手をひらひらさせ、ちゃんと寝ているか確認する。

寝ている事が確認できたので、軽くほっぺをつついてみる。柔らかいな…

???「むにゅ」

ぶにぶにとつつくたびに、軽く反応するのですます面白くなってしまった。

両ほほをひっぱってみる。

???「うゝゝ…うにゃ…？」

ひっぱっていたら不意に少女の目が開いた。

???「うわぁー！き…君は誰なのさ！？なんで僕のほほをひっぱってたんだよう」

蓮「えっ…と俺は篠宮 蓮、君があまりにも気持ちよさそうに寝ていたからつい…」

あまりの相手の慌てように笑いがこみ上げてきてしまい、話しているとき不意に頬が緩んでしまった。

???「ううゝサボって寝てた僕も悪いけど、その寝てる人に悪戯

しちゃだめなんだよう。」

蓮「ごめんごめん…ところで今日授業どうしたの？」

「???」そんなの休んだにきまつてるじゃないか。君もこんな時間にいるって事は休んだんでしょ？」

蓮「まあな。あつと…聞くの忘れてた…君の名前は？」

ミラ「僕の名前はミラっていうんだよう。」

蓮「そつか。んじゃここで会ったのも何かの縁ってことで、よろしくなミラ。」

そう言いながら手を差し伸べると目の前の少女もそーっと手を伸ばしてきて、握手してくれた。

とりあえず警戒はといてくれたみたいだし俺はもう行くとするかね…

ミラ「どこに行くのさ?？」

蓮「どこって…言われてもな。まあテキトーにぶらぶらかな?」

俺が答えると彼女は、少し考え込むような仕草をしてから、俺の方に小走りでやって来る。

ミラ「行くところがないなら生徒会室に来ないかい?」

蓮「生徒会室?なんだってそんなところに行かなくちゃいけないんだよ。なんかあるのか?」

ミラ「うーん…この時間なら誰もいないと思ったんだよ。僕も蓮も今日サボってるからそこで時間つぶすのはどうかな?って思ったん

「ただどダメかなあ？」

そう言いながら上目遣いで見てくる。これは反則だろう…俺は小さい子が好きなわけじゃないが…こうゆう上目遣いは俺の心にグツとくるものがあるんだよな…

マジでいかんよ…これ…こんなことされたら生徒会室に行くくらいじゃないね。

蓮「わかった。わかった。んじゃ行かせてもらっよ」

ミラ「わーい。それじゃ早速行こっよ！」

ミラが走って屋上の出口へ向かう——何か忘れてるような気がするんだけど…

ミラが扉の鍵を開けて開けようとした瞬間に思い出した。

蓮「やべっ…変態教師忘れてた…」

ミラ「きゃああああー！」

教師「や　ら　な…ちっ、女か…」

ツナギの上を脱ぎかけている変態を見てミラが叫ぶ声が聞こえる。
あゝあミラが泣いちゃったよ…かわいそうに。

しかたねえな…

蓮「おい変態！！俺はこっちだぞ？」

扉に近づきすぎず、相手に見えるように遠くから姿を見せ挑発する。
ミラを泣かせた罰としてちよっぴりお仕置きしなくちゃな。

教師「うほっ！いい男…じゃなくて貴様まだこんなところにいたのか。特別指導してやるから、さあこっちに来い。」

うわっ、最悪だ…完全にヤル気満々だよ…

蓮「お前がこつちまで来ればいいだろ？なんで俺がそつちまで行かなくちゃいけないんだよ」

教師「よしいだろう。そこを動くなよ…」

ニヤニヤハアハアしながらこつちに近寄ってくる。

とりあえず泣いてうずくまってるミラからあいつを引き剥がしせたい。

次はどうやって対処するかだよな…

あいつの言うとおりに指導室は行く気なんかさらさらないし、かといって逃げるわけにもいかん。

結局…これしかないんだよな。

ゆっくり両腕を目線の高さまで上げて臨戦態勢をとる。

教師「なんだ？ここでヤろうつてのか？」

蓮「いちいち人の神経逆撫でする奴だな…そんなにやって欲しいなら殺ってやるよ…！」

変態教師がこちらに近づききる前に、自ら踏み込み接近して渾身の力をこめた右拳を突き出す。

教師「ぐふあ…」

変態教師の腹部にクリーンヒットする。どうやらこちらからの反撃を予想していなかったようで、異常なほど痛がっている。

蓮「よし。今のうちに…」

蹲って悶絶している変態をおいておき、ミラのもとへ行き二人で急いで階段を下りて屋上を後にした。

三日目（後）

く三階廊下く

ミラ「ううう怖かったよう。」

階段を降りた後もミラは半泣きになったままで何やらブツブツ言ってる。

あんなもん見たらそりゃトラウマになるわな。

でもあんなのでも教師？なんだよな…殴っちゃったけど大丈夫かな？

ミラのことをなぐさめながら歩いていると『生徒会室く関係者以外立入禁止く』と扉の横に書かれた部屋の前に着いた。

ミラ「ここだよ。今なら誰もいないと思うからゆっくりできるよ」

すっかり機嫌がもどつて、ニコニコしているミラが、扉を開け一緒に中に入る。

???「誰だ？今はまだ授業中だろう？こんな所に何のようだ？」

ミラ「あつ……忘れてた……」

部屋に入るなり椅子に座っていた、ベレー帽みたいな帽子を被っている女の子が鋭い視線を浴びせてくる。

それはもう視線だけで人を睨み殺せるくらいにキツツイ視線を。

「???」「ミラ、そいつは誰だ？見ない顔だが…」

ミラ「えーっと…この人は蓮君っていつて生徒会室に呼んだのは、私の一存だから蓮君はわるくないよう」

「???」「・・・また授業サボったのか？」

椅子から立ち上がりミラの方へ近づく。

ミラ「だってつまらないんだもん。」

「???」「いくらつまらなくてもちゃんと出席しなくちゃ駄目なのだぞ？」

ミラ「うう〜」

一通りミラに説教をすると俺の方を向き、一度軽く頭を下げ、
イリア「先ほどはいきなり睨みつけてすまなかった。私はイリアという。君は？」

蓮「いや別に構わないけど…俺は篠宮蓮だ。よろしくな？」

互いに挨拶を済ませるとイリアはもといた場所に帰り再び椅子に深く腰掛ける。

態度はツンツンしてるけど悪い奴じゃなさそうだな。

イリア「とりあえず君たちも座りたまえ。立ち話もなんだろう？」

イリアがそういう前にミラは既に置いてあったソファーに座って二

コニコしている。

とりあえず俺も座るか…

ミラの真向かいの位置にあるソファーに座る。

イリア「ところでミラ、なんで篠宮君をここに連れてきたのだ？」

ミラ「えーっとねえ、最初は屋上にいたんだけど蓮君が来て、変な人が来てここにこようってなったの！」

イリア「なったの！じゃ、ないでしょう…はあ…もつと分かりやすく説明してくれないか。」

この後15分間ほどミラの変な説明↓イリア混乱。
の図式が目の前で繰り広げられていた。

イリア「つまりだな…篠宮君が屋上で寝ているミラの邪魔をして、生徒会室の話になりその後、篠宮君を追っていた変な人が現れ篠宮君がそれを撃退して今に至ると？こつゆうわけなのだな？」

おお！やつと話がまとまったみたいだ。

しかしなんでこんな事を説明するのに15分もかかるのだろう。

ミラ「ピンポン！！正解だよう！」

イリア「私はクイズをやっているのではないぞ！まったくでミラがここに人を連れてくるということは…」

ん？なーんか嫌な予感がするよな…この会話の流れからいうと俺…

生徒会入れってオチじゃないよな？

ミラ「そう蓮君にも入ってもらおうかと思ったんだよう」

ですよねー、なんとなく雰囲気でわかったよ、チクシヨウ。

イリア「確かに今の生徒会は人数も少ないしな…しかし一歩間違ったら死ぬんだぞ？篠宮君はそんなに強いのか？」

はい！？なんで生徒会で『死』とかいう単語を聞くことになるのかな？

訳が分からないんですが…

ミラ「大丈夫だよ。蓮君は僕を守ってくれたんだよ？だから…大丈夫だと思う」

イリア「思いつて…はあ…まあいびに入る意思はあるのか？」

蓮「そんなのあるわく」あるにきまつてるよう」「

ちょ…おまつ…人がまだ混乱してる時になに言ってるの？

イリア「む…そうか。ならいいのだが。」

おいおい。お前も、なに納得してんだよ。

ミラ「やったね蓮君！」

ぐう…だからそのキラキラした上目遣いでこっちに来るのはやめろって…

なにも言い返せなくなるだろうが…

イリア「よかった。昨日も一人入ってくれたおかげでやっと正式にメンバーが集まった。これでギルドに登録できる。」

イリアも少し嬉しそうにしてるし…これじゃ今更やめますなんか言えねえよな。

イリア「それじゃ私はギルドに登録に行つて来るから後は自由にしておいていいぞ。」

そう言い残しイリアは部屋を出て行ってしまった。
とりあえず入っちゃったもんはしかたないし、ミラにギルドとかの説明してもらおうとするかな…

―― 6 時間後 ― 自室

「ミラに説明して貰おう」
そう思った俺が馬鹿だった。

ミラにこれから説明は二度と頼まないようにしよう。
5時間もかけて説明されるとは思わなかった。
もう途中から何言ってるのかわからなかったし。
2時間が経過した辺りで帰つて来たイリアも状況を察するやいなや、
すぐに急用を思い出したといって逃げるし。

かなり疲れた。あれは説明ベタってレベルじゃない…
今度からは気をつけるとしよう。

今日はもう何もする気が起きないし…寝よう。

第四話

——目が覚める。

寝ぼけ眼のまま時計を見る。

針はちょうど7時半を指そうとしていた。

蓮「こんなもんか…あゝ、ねみい…」

ベットから降りようとしたとき、部屋にいい匂いが漂っているのに気がついた。

なんだろう？美味しそうな飯の匂いがキッチンから漂ってくる。
おかしい…俺はこの部屋で誰かと同棲してるわけでもないし、いちいち飯を作りに来てくれる通い妻みたいな人がいるわけでもない…
じゃあ…誰だよ！？

不法進入だろ…第一に鍵はどうなったんだ？

昨日いくら疲れてたといっても鍵くらいかけたはずなんだが…

……念のため、用心しながら行ってみるか。

キッチンに近づくと包丁で何かを規則正しく切る音が聞こえてくる。
間違いない誰かいる…しかもどうでもいいことだが料理が上手いや

つだな。

ゆっくり、ばれない様にキッチンを覗くとそこにいたのは…

エリス「〜〜〜〜」

エプロン姿で鼻歌を歌いながら料理しているエリスだった。

蓮「お前かよ…」

エリス「うわっ！あんた起きてたの？起きてたんなら起きてるって
言いなさいよ。びっくりするじゃない。」

蓮「びっくりするのはこっちのほうだっつゝの。お前何してるの？」
エリス「見て分からないかしら？朝ごはんを作っであげてるんだけど。」

蓮「いや、それはわかるから。ってか、どうやってここまで入ってきたんだよ？」

エリス「どこって…入り口からだけど？当たり前じゃない」

蓮「ばっ…鍵はどうした!？」

エリス「あゝ壊しちゃった。ごめんね？」

やっぱりか…入り口から無理に入っただけなら壊すしかないしな…やっ
てくれるぜまったく…

蓮「つつか…もう一回言っけど何でお前ここにいるの？今から飯食
ってたら間に合わないぞ？」

エリスは何を言っているのか理解できないといった表情でこっちを見ている。

そんな顔されてもしかたないだろ？実際にもう7時半なんだから。

エリス「今日は休みでしょ？何言ってるの？」

何言ってるのって…えっ！？今日休みかよ！！

こっちに来てから時間感覚が殆どないから分からなかった…

エリス「そうよ？それよりあんた、昨日休んで何してたのよ？」

蓮「何って…その…あれなんだろ？変な奴に追われて逃げて、入団した的な。」

めんどくさすぎて所々、端折りながら簡潔に説明する。

エリス「そんな説明じゃ全く分からないわよ。」

作った料理をテーブルに並べながら不満をもらす

実際問題言っても別に構わないのだが…

エリス「まあ、いいわ。速く食べましょ。今日はこの後みっちり修行してもらうんだからね。」

蓮「まじかよ…」

エリスの作ってくれた朝食を食べながら、この後の時間がだんだん気が気じゃなくなってくる。

蓮「今日は何の修行をするんだ？」

エリス「当然、剣よ。最低でも雑魚の魔物ぐらいは退治できるようになって貰わなくちゃね。」

…どうやら俺は今日も地獄の特訓コースのようだ…

第四話（中）

朝食を終えた俺達は、訓練場に行くための準備をする。

エリスは「忘れ物したから先に行つてて」などと言って部屋を出て行つてしまった。

特に持つていくものも多くはないので、この前買った剣だけ持つて訓練場に急ぐ事にした。

―訓練場―

蓮「それにしてもエリスの奴、遅いな…もう30分は経つんじゃないか。」

ポツンと一人で訓練場にいる俺、エリスの奴はあれから30分ほど一回も顔を見せてない。

これは一度あいつの部屋に行くべきだろうか？

そう考えた瞬間、一つの問題がすぐに頭をよぎった

俺はエリスの部屋がどこにあるか知らない。

蓮「…しかたないな。一人で素振りでもしてるか…」

どちらにせよこんな広い場所に一人でいて何もしないというのも、なんか嫌なのでとりあえず素振りでもして基礎体力を高める事にした。

（1時間後）

蓮「ちつくししょう…ハアハア…もう体が動かねえ…あのやろー今頃なにしてんだよ…」

数えるのもままならないくらいに、剣を振って床に倒れた後エリスに向かって一人で文句を呟いていると、突然部屋の扉が開く音がした。

足音は一人ではなく2、3人くらいのものだ、誰かが訓練しに来たのかと思い慌てて起き上がり、扉の方に目をやる。

蓮「なっ………」

そこで目にしたのは…とても中のよさそうなエリス、ミラ、イリアの三人組だった。

エリス「ごめんね〜ただ剣を振るだけじゃつまらないかな？っと思
ったから新しく一緒に訓練してくれる人を探してたの。紹介するわ
ねこっちが…」

蓮「イリアとミラ…だろ？知ってるよ。」

イリア「大丈夫か篠宮君。みたところ相当疲労しているようだ。」

エリス「えっ!？」

エリスを尻目に挨拶する。

どうやらエリスは俺達が初対面だと思っていたらしく、驚きを隠せ
ないようだ。

蓮「まあ、なんとか大丈夫です。」

ミラ「蓮君すごい！こんなに汗だくになっちゃってる〜頑張った
んだね〜」

蓮「フツ！まあな」

一通り挨拶が済むとエリスがあきれた表情でこちらを見ている。
思い描いていた通りに事が進まなくて、がっかりしているのだろうか。

それにしてもなぜイリア達を連れてきたのだろうか？

…あんまり想像したくないが、彼女たちもエリス並に強いのだろうか…

エリス「まあ…あんたたちが知り合いつていうのはわかったけど、
蓮…あんたイリアと私…それにミラの序列順位知ってるの？」

蓮「いや…知らない」

エリス「でしうね…私は3位よ」

イリア「私は2位だな…」

ミラ「僕は、763位だよう…」

蓮

「げえ…ミラはともかく、イリアとエリスってそんなに強かったのかよ…」

エリス

「そうよ、ちなみにアンタじゃミラに勝てないでしうね。」

蓮

「ぐ…ミラって何使うんだよ？」

ミラ

「電気だよう〜ビリビリ〜」

ミラの体が帯電し始める。

どうやら確かに俺はミラにも勝てそうにない…

第四話（後）

エリス

「まあ、とりあえず練習を始めましょうか。まずはどのくらい剣を扱えるようになったか私が見てあげるわ」

二人分の木剣を取り出しながら、軽く微笑むエリス。

エリス

「課題としては、気絶しない事ね、はい。」

笑顔のエリスから木剣を受けとる。

コイツ…本気で攻撃してくる気だ…、大方なんでイリア達のこと話さないのよってところだろうな。

イリア

「では、私も篠宮君の腕前を見せて貰おうか。」

イリアとミラが少しはなれたところで観戦している。
俺達は、部屋の中央付近で少し距離をとり互いに構える。

エリス

「好きに打ち込んでいていいわよ？」

と、言われるが…打ち込む隙なんぞ微塵もない。
完全にやられる、打ち込もうとした瞬間にカウンターでボコられる
のは目に見えていた。

エリス

「こないの？ならこっちからいくよ？」

異常なまでに鋭い突きが俺の髪をかすめる。

蓮

「あつぶねえ…当たってたら気絶もんだぞ…」

次のが打ち込まれる前に集中して構えなおす。
一度くらい…当ててやるよ！

小さく速く振ることを意識しつつ、この前見たエリスの動きを思い
出す。

体重を乗せた突きを放つが、簡単に避けられてしまう。

エリス

「あら、今のなかなか良かったわよ？上達してるじゃない。」

蓮

「そいつはどーも…」

くそつ、渾身の一撃だったのに簡単に避けられる……仕方ない、とにかくまともにもらわないようにしないとな。

エリス

「私も、あんまり長い事やるつもりはないから…終わらせちゃいましょう。」

次の瞬間とんでもない光景が見えた。

——突きの弾幕、俺の目の前の視界がエリスの突きで埋まっている、ヤバイ…これは防ぐ事も避ける事も出来そうにない…

俺は結果的に突きの弾幕に被弾してその場にぶっ倒れてしまった。

蓮

「ド…ちく、しょ…お」

気がつくと俺が寝ていて、みんなに囲まれた状態だった。

エリスたちは、なにやら序列戦について話しているようだった。
一体どういふことなのだろうか、話を寝ながら盗み聞きしていると、
ミラがこちらに気づいたようだ。

ミラ

「蓮君気がついたんだね！」

いつまでも寝ているわけにもいけないので起きる。

エリス

「まったく…大丈夫なの？アレくらいで気絶してたら本番でもたないわよ？」

エリスが少し申し訳なさそうに言うてくる。

確かに、自分では少し強くなったつもりだったが、これではまだまだのような。

俺には魔法が使えないんだからもっと肉体面を強くしなきゃな…

蓮

「ああ、わりいな…」

イリア

「だが、エリスの話ではなかなかに進歩しているらしいではないか」

自分でも、進歩している自覚はある。

前は全く見えなかったエリスの太刀筋を僅かだが見ることが出来るのだから。

エリス

「進歩はしているわ、だけど魔術師を相手にした場合はまだまだね。」

……俺も少しくらい魔法だ使えたらなあ…

まあ、ないものねだりしても仕方ないか。

イリア

「さて、篠宮君の意識も戻ったことだし、次は私だな。」

エリス

「そうね、遠距離戦も学んだほうがいいわね。」

遠距離？ってことは対魔法か？

おいおい、当たっても死なないようなものにしてくれよな…

蓮

「よっしゃ、いつでもいいぜ。」

エリスとミラは遠くの方に行ってこちらを観戦する。

イリア

「私の攻撃は少し当たると痛いからな？」

そういいながらイリアが取り出したのは、二丁の短銃だった。

…おいっ！ヤバイだろ！なんで銃なんか持ち出してんだよっ

イリア

「さて、始めるか…」

銃口がこちらを向く、どうやら覚悟を決めるしかないようだ。

ドンッ

イリアの持つ銃から火が吹く

俺の足元に二発着弾する。

やっぱり銃弾を見切るのはキツイな

ってか、無理がある。

なんとかして距離を詰めなくては、このままでは今は何とかなってもジリ貧で終わっていつてしまう。

俺がいろいろと思考している間に、どんどん銃をぶっ放されている。

正直ワザと外して貰っているみたいだ。

イリア

「どうした、そのままでは何も出来ないまま終わっていくぞ」

くっそ、もう考えてられるか！突っ込まなきゃ負けるんだ！

一定のタイミングで撃たれる銃弾をぎりぎりですぐ避け、一直線に相手の懐に飛び込む。

イリア

「ほう…それなりに速いじゃないか…」

よし、いける…！

と、思った瞬間 俺の足と手が急に動かなくなった。

蓮

「なっ！？」

よく見ると俺の四肢に光の輪みたいなものがくっついている。
手足を動かそうと思ってもまったく動かない。
その場に固定されているようだ。

イリア

「フフ…残念だったな、そんなに見破りやすいバレバレの突撃をされたら、誰だって対抗策に一つや二つ用意するさ。」

ゆっくりとイリアが近づいてくる。

蓮

「マジかよ…」

二人に負けたことによる悲しさよりも、一撃すら当てられなかったことによるふがいなさというか悔しさみたいなものが胸にこみ上げてくる。

イリア

「しかし、エリスに聞いていた情報よりも動きがいいな。そこは褒めてやるっ」

なんだよ、褒めてやろうって…よけいに悔しいだろ…

エリス

「あつけないのね…もうちょっといけるかな？って思ったのだけれど無理だったわね…」

うるせえ…大体、こっちはそういう魔術使えないんだぞ。これでも頑張ったほうだ。なんで口調が若干楽しそうなんだよ…

ミラ

「蓮君…、だいじょぶかな？」

なんだろ…俺そういう趣味ないはずなのに…ヤバイな俺。

イリア

「まあ…そうだな今の試合でわかったのだが、君には目標との距離を詰める方法があまりないみたいだな。」

痛いところをついてきやがる…確かにダッシュだけってのはやばいよな…こいつらみたいに手加減してくれる奴ばかりじゃないわけなんだろうし…

エリス

「私達といるときはいいけど、一人のときが問題ね…いっそのことダッシュ力強化しちゃったら？」

イリア

「古典的な方法だが篠宮君…今から特訓をしよう。」

蓮

「どんなのですか？」

イリア

「なに、至極簡単な事だ…走ってくれ。」

いや、にっこり笑顔で言われても…やりたくないんだが…

蓮

「え…走るだけですか？」

エリス

「ほら、つべこべ言わず走る！とりあえずここ20周ね。」

お前は鬼か！？

蓮

「いや、ちょっとまって！ここ意外と広いんだぞ！？」

講義したとたんに頬を何かがかすめる…その後、後ろにある石柱が砕ける音がする。

イリアだ…どうやらさっきまで俺に向かって撃っていたのは、かなり威力をセーブしたようだ…
さっきは石の床に少し痕が残っただけだが、今は完全にそれが粉碎できるレベルだ…

イリア

「・・・すまない手が滑った。」

蓮

「手が滑ったレベルじゃねえぞ！？当たってたら頭弾けてたわっ！
！」

エリス

「これでわかったかしら？拒否権なんかないのよ。さ、行きなさい」

蓮

「覚えてろよっ！！！！」

しかたなく部屋の隅から走り始める。

意外と広いといっても俺が通っていた学校の体育館ぐらいだ…なんとか…なる、かな？

16週目が終わる頃には、意識が殆どなく走りながら俺の意識はブラックアウトした…

五日目（前）

目が覚めて飛び起きる。

視界に入るのは俺の部屋のものではないベットだ。

俺は一体何故こんなところにいるんだ！？

昨日は確か……走らされている途中で限界になって意識がなくなつて……駄目だ、そこから先を覚えていない。

とりあえず……ここはどこなんだ……

頭の中で状況整理していると突然横の方でモゾモゾと動くものがある慌てて布団をめくつてみると………イリアー?!?!?

まてまてっ!! 落ち着け俺!

これは幻覚かなんだ…目を閉じて深呼吸して、ともう一度見てみる………何度見てもそこにいるのは、パジャマ姿のイリアだ。

どうしよう…据え膳食わぬは男の恥…じゃなくて!!

いかんいかん、変な考えが頭に浮かぶ。

とりあえず起こさないようにそっとベットから降りる。

寢室を出るとこれまた見たことのないリビングだ。

…まったく身に覚えがない。

おそらく昨日ぶっ倒れた後にここに運ばれたのだろうか？

なにはともあれ、現状が掴めたら腹が減ってきた…

勝手に何か作っても文句言われなйдらうか…

まあ、あとで何か言われたらその分買ってきて補充すればいいか。

蓮「えっと…あれ？食材がない、」

キッチンのあたりを探してみても食材が出てこない。

出てくるのは、缶詰とか、インスタント食品のようなものばかりだ。

蓮「しょうがないか…」

適当な缶詰を一つ取り出してリビングへもって行き、食べる。

意外にうまい。

たしか昨日が正規の休みだったから、今日も一日休みだよな…

蓮「……今日は、なにしようかな……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1626v/>

magic&#sowrd

2011年10月9日13時30分発行